

## 〈はじめに〉

釣りの仕方の一つに手釣りというのがあります。とても単純なもので、この釣りには竿も浮きも要りません。ただ、釣り針にエサをつけた糸を、ドボンと水の中に落とし、魚がかかったら釣り上げるというものです。夏目漱石の小説「坊ちゃん」にも、坊ちゃんが、赤シャツや野だいこと、海で手釣りをするシーンが出て来ます。非常にシンプルな釣りですが、簡単かという点意外に難しい。魚がエサを引くと、人差し指にひっかいた糸に、クイクイという感触が伝わります。その微妙な強弱や間合いを測って糸を手繰り寄せないと、魚を釣り上げることはできません。シンプルだが奥の深い釣りだと言えるでしょう。◆今回のテーマは、質問です。なぜ、まったく関係のない釣りの話をしたのかというと、「質問とは何か」をずっと考えているうちに、ふとそれが、手釣りによく似ている、と感じたからです。人間と魚が互いに探りを入れながら、クイクイと糸を引く(・・手釣りでは、人間の方も魚をおびき寄せるためにクイクイと糸を引くのです)、ボクシングで言えばジャブの出し合いのような駆け引きが、会話においては「質問」なのではないか、と思ったのです。

◆たとえば、日々の会話を文字に起こして内容を調べてみると、やりとりの半分程度は何らかの疑問文であることがわかります。疑問文とは、もちろん何かを問うときに使う文で、自分の知らない情報を相手に求めるときに使われます。「集合場所はどこですか?」「3時までに届けられますか?」・・・仕事や学習の場面で、その情報がどうしても必要なとき、私たちは疑問文を使います。しかし、日常会話の疑問文の多くは、その答えがないと非常に困る、というほどのものではありません。たとえば、気楽なおしゃべりの場面でも疑問文はたくさん登場します。「ほんと?」「ふーん、それで?」「え、いいの?」「どんな感じ?」・・・わたしたちはなぜ、それら不急不要の質問を連発するのでしょうか。問いに対する答えを、それほど求めているわけでもない状況なのに・・・◆もし私たちが、何かを求めているとすれば、それは答えではなく、相手との“つながり”かもしれません。自分と相手との間の無数の問いかけは、両者が握り合っている糸を、クイクイと、あたかも手釣りのときのように引き合いながら、間合いを測ったり、心の色を読んだりするものではないでしょうか。◆釣りをしていると、人間側の勝手な言い分かもしれませんが、釣ろうとしている魚にある種の親近感を覚えることがあります。何度も同じ魚にエサだけとられて悔しさを覚える半面、知恵比べの相手としての仲間意識のようなものが芽生えます。先ほど、駆け引きや探り合いということばを使いましたが、それは別の観点からみれば、人間が、他者との関係性を壊さぬように仲良くやっへ行こう、という意志の表れなのではないかと思います。◆発達障害を持つ子どもは、おおむね質問が苦手です。毎日の困りごとを解決するために、相手に質問ができる、ということはとても重要なことです。未熟さが強い子どもは、まず、そこから、と思います。ただ、質問の役割は、問題解決だけではありません。生活のさまざまな場面では、絶対しなければならない質問より、コミュニケーションの潤滑油として働く質問の方が、はるかに多いのです。積極的な会話参加を可能とし、コミュニケーションに充足感をもたらすものとしての質問について、考えて行きたいと思います。